

スポーツ少年団の理念

(第1版)1964年

なぜスポーツ少年団が育たねばならないのか。私達の考え方

目次

- 第1章 平和への二つの道
- 第2章 スポーツの本質
- 第3章 スポーツの効果
- 第4章 日本スポーツ少年団の指導原理
- 第5章 時代の要求する少年像

第1章 平和への二つの道

1

近代社会に、新教育運動の烽火となったジョン・デューイの「学校と社会」およびエレンケイ女史の「児童の世紀」が公刊されたのは、共に一九〇〇年であって、二十世紀は恰も人間教育への新しい希望のうちに明けたかに見えた。

しかるに早くも一九一四年、セルビアの一青年の放った銃弾によって第一次世界大戦が勃発し、その終り近い一九一七年に政治革命に成功したロシアは、宏大なるソビエト聯邦に生まれ変わり、さらに一九三三年のナチス政府の出現をきっかけにして第二次世界大戦（一九三九 - 四五年）が起こり、ドイツ民族は二分されて禍根を将来に残し、この大戦後に成功した中国革命は、朝鮮、ベトナムを南北に分離し、とくに台湾政府の新樹立という新事態を生み、冷戦、少数諸民族の植民政治よりの相次ぐ解放と独立など、戦争への危険は、去っていないというよりはむしろ増大している。とくに世界人口の半数を擁するアジアは、ますます騒然として、もしアジアに平和を望むなら、不可能を可能にしなければならぬようなアポリアの前に、世界は立たされている。

このように人類はいまや、自らの新しい世界秩序を創り出すために、自らの運命を賭けた緊迫感のうちに、あらゆる努力を払い始めている。この努力が、もし第一次世界大戦の焼跡から国際連盟（一九二〇年）が生まれ、第二次世界大戦の爪跡から国際連合（一九四五年）が誕生したように、第三次世界大戦後に来る国際平和への新しい機構に期待するとしたら、そのときはすでに、この地球は、核の分裂や融合作用によって燃え上ったあとであって間に合わないのである。世界諸情勢を、このように、全く一変したのは、核兵器の発達と貯蔵が原因であるからである。

イギリスの数理哲学者バートランド・ラッセルは、米ソの首脳に書き送った書簡のなか

で、「共産主義と反共産主義の競争をやめる必要はないが、軍事的な面でそうすることはやめた方が、米ソ両方のために、また世界人類の利益である」と強調した。またドイツのスポーツ理論に哲学的影響を与えた実存主義哲学の権威であるカール・ヤスパースは、放送講演のなかで、「多くの人々が、さし迫った人類滅亡の危険を見すごして暮らしているのは、人間理性の尊厳にたいする冒瀆である。もし生きのびたいと思うなら、人間そのものを変らなければならぬ」と訴えている。

こうしたものの見方は、全く新しいものである。「極めて些細なものや、極めて日常的なものに、無知でいたり、鋭い眼をもたないということは、限りない緑の草原を、死の草原にかえることになる。」(ニーチェ)われわれは人類と共に、個人に対しても、歴史や文化と共に科学にたいしても、新しいものの見方をもたなくてはならぬ。さらにわれわれの当面する問題として、今は幼い存在であっても、やがて次代の運命を決定する少年・少女にたいして、また人々から余計もの扱いにされている遊戯やスポーツにたいしても新しいものの見方をもたなくてはならぬ。

地上に住む人間にとって、世界は一つである。この地球は全人類にとっての永遠の棲み家であり、また食料の永遠の宝庫でもある。人類の現在の苦しみは、国際聯盟から国際連合を経て、人類滅亡戦の前に、人類救済最後の権威ある平和機構となる、人類史上最初の新しい世界秩序を創り出すための深い悩みである。湯川秀樹博士は、「このことを特に痛感しているのは科学者である。……科学者は誰よりも早く、世界は一つであるという自覚を持っている」(「自然と理性」)と言っている。勝れた科学者たちは、科学が事実上発達してきたその基礎に立って、科学本来の使命について反省し、科学研究室は、むしろ人間生活の内容を豊かにし、人類の富と力を増大する殿堂であるべきだと自覚し初めている。科学者のこの知性への誠実さを、われわれは信頼すべきである。同時にわれわれ自身が、地球大のものの見方に慣れて行かねばならぬ。

2

他面、世界平和運動への一環としての新しい軌道が、すでに 20 世紀の黎明期に、教育、文化、歴史についての透徹した思想から準備されていたことを、ここで、見のがすことはできない。世界教育を変革して、清新なる近代的教育をうち立て、それによって社会を変革しようとする情熱を燃やしていた二十六才のクーベルタンの心に、新たに歴史の光がさしたとき彼は、当時の主知主義教育の危険に対して、スポーツ的訓練によって、人間に生きる力を与え、地上に平和をもたらそうと考えた。すなわち、「スポーツを、歴史の光のさす場所に移し、そして歴史のなかに生きるわれわれが、歴史の中にその場所を得ているスポーツに対して、すべて責任のあることを示そう」として、一大平和事業に着手したのである。一八九四年六月十六日から二十四日にわたって開催されたソルボンヌ会議の最終日に、彼は、過去を捨てつつも、過去の栄光に恥じぬ未来の到来を信じて、「オリンピック大会の採用」という宣言で、その会議の幕を閉じたのである。

アクロポリスの丘の上に立った古代ギリシア人が、紺碧の海から、真紅に燃えて立ちの

ぼる巨大なる太陽を、力と美の神なるアポロとして祀り、永遠の美を誇るゼウスの神殿を造営したことは、古代宗教史から見ても、極めて自然な現象である。古代ギリシアの若人たちは、この神殿の前で、力と美の業を競い、神に捧げたのである。この古代ギリシアのオリンピアが、その理念と共に、約一〇〇〇年間、人類の歴史の中から消え、歴史の地下に埋もれていた。その主なる原因は、東ローマ帝国が都していた、ピザンチン文化の中心地コンスタンチノーブルからの宗教的圧迫であった。

中世期の暗黒時代がすぎ、新しい感情から人間が再発見されたとき、人間を中心に世界を考えるとというルネサンスの新しい近代的思想が生まれた。その頃になって漸く、人々の心に古代オリンピアへの思慕の情が芽生え、古代オリンピアの遺蹟は英、仏、独によって発掘され、その全貌がふたたび歴史の光を浴びるようになった。しかし、オリンピア競技の完全なる理念は、若きクーベルタンの歴史的精神の偉大なる英和と情熱の洗礼をうけて近代にふたたび蘇生したのであった。彼のスポーツの性格についての厳しさは、実にこの歴史のなかのオリンピック理念のリバイバルを期待してのことである。

オリンピックの理念など、いまだ言葉にもならなかった当時のこととて、そこには多くの困難があった。しかし「彼の心の聖地であるスポーツ、人類文化高揚のためのスポーツ、オリンピック事業の規範的な性格」から、「こんなとき私は、後退しようなどとは、決して考えなかった」と述懐している。困難であればあるほど彼は、深刻な厳しさで、それらと対決した。そして単身ギリシアに乗り込んで、ついに一八五六年の第1回、ギリシア・オリンピック大会の開催を獲得したのであった。日本では、時恰も日清戦役（一八九四 - 九五年）のさなかであった。

世界史の一大転換期に、政治哲学の貧困から、世界の政治家たちが、人類の運命にたいする見透しを未だもっていなかった時代に、彼は、政治を越えたスポーツによって、人類に生きる新しい力を与え、地上に歓びと平和をもたらし、人類を一つに結ぶ近代オリンピアを復興したのであった。そして彼は、「体育および競技的スポーツの国家的企画が、オリンピック・ムーブメントの高い道徳的原則に従うとき、少年、少女を、より強く、より健康に育成し、よりよき市民となる事実を、オリンピック大会を通じて、各国家に注意させたかった」のである。

人間の可能性のうち最大なるものは、人間の自己形成であるが、スポーツ訓練の中では、フェアプレーやスポーツマンシップとしての意思と精神の自由なる存在へ自己を形成する。人間が、この意思と精神の自由にいる限り、いかなる運命も彼をもてあそぶことはできない。一九三六年ベルリンで開かれた第十一回オリンピア大会の決定は、一九三三年の政府変更の数年前すでに行われていた。それだけに内外からの論難を浴びたのであったがドイツ人は、いかなる党や政府をも超越してIOCの一切の要求を受け入れて、すばらしい施設と勝れた運営によって、この大会を成功させた。これなどは、オリンピアの高邁なる理念と高き道徳の原則にしたがってスポーツを続けていさえすれば、政治の方からそれへ近づかざるを得ないことを実証したものと言えよう。

このように、スポーツ訓練による人間の自己形成が、根源的な意味をもつのは、スポーツが、「歓び」の中で営まれる行為であるということからきている。歓びは、心の本質の深層ではたらく心的機能である。歓びについて哲人はこう歌っている。

世界の悲しみは深い。

だが歓びは、心の悩みよりも深い。

悲しみは言う。去れ！と。

だが歓びは、すべて永遠を欲するのだ。

深き、深き永遠を。……ニーチェ

スポーツによる人間の自己形成は、歓びの欲する深き永遠が、自分自身の実体となる自然の営みであるといえる。スポーツする行為では、歓びの感情の中で仲間意識が目覚めて、心から心へと交うのである。この友愛こそは、すべての sociality nationality internationality の基盤となり、またそれらを絶えず浄化しまた純化していく人間感情である。このように人間は、あらゆる自然の性質を持ちながら、自己の上に聳え立っている或るものとしての人間へ迫っていく。そこに人間が、自然の存在から、高貴なる価値の対象となる文化への道がある。

すでに明らかのように、クーベルタンのスポーツは、人類発達史の中で躍動しているスポーツであって、それは凡ゆる文化に先行し、しかも高き文化創造の原動力になっているという事実の中で、オリンピックの理念を提えている。したがって彼は確信して「スポーツは、すべての人に、その人生行路に与えられた賜物であって、他にかけがえのないものである」ということができたのである。もことに彼は、歴史の中に生き、また歴史は彼の中に生きつづけていた。したがって彼のスポーツへの情熱と責任感の支柱は、「歴史は、何にもまして、平和を確保してくれるものである」ということであつた。いかにも歴史は、人間解放の自由の歴史であり、彼は人間解放の根本力を、歴史の中のスポーツに托していた。かかるクーベルタンの思想こそは、やがて来るべき権威ある世界平和機構の中味を形づくることになるう。

さらに彼の歴史的な理念としてのスポーツは、現在デモクラシー社会建設途上にあるわが民族にとっては、とくに国民のすべてに、新しい生きる力を与え、新しい人間を作り、わが民族を、その精神的危機から救って余りあるものとなるう。

第2章 スポーツの本質

1. スポーツとは何か

スポーツの本質は何かという問いにたいして、ここに一つの重要な手掛りになるものがある。それは、人間の本能ないし衝動として子供に現れる遊戯である。カール・ディームは、「すべてのスポーツは、遊戯としてのシュピール spiel に始まり、競技としての spiel に終る」と言っている。このことは、諸民族の言葉からも説明できる。ドイツ語の spiel が遊戯と競技の意味に使われているように、英語のプレー play も、ロシア語のイグラー Игр

'a も、共に遊戯と競技の意味に使われている。古代民族の祭りにおける奉納競技が、遊びと一体であったことは、われわれにも容易に理解できる。ここでまず次のことを提案しておきたい。

人間の衝動的遊戯性のもつ本質的性格を失っては、いかなるスポーツも、真のスポーツとしては存在し得ない。

このことは、とくに、発育の可能性の最も大きい少年・少女を対象とするばあい、この生物学的、文化的、歴史的事実は、一層重視されなくてはならぬ。

しかし、自然は、人間の子らだけでなく、動物の子らにも同じく遊びを与えている。ただ動物の子らのばあい、発育の終止と共に、その遊びは消滅するのに、人間種族のばあいは、その発育が一応完了したあとまで続き、さらに競技的スポーツとして一生を通じて行われる。それは、なぜなのか。ここにスポーツの本質を理解できる一つの鍵がある。

人類学者は、人間種族を動物から区別するのに、ホモ・サピエンス homo sapiens（人間、すなわち理性的存在）という表現を用いている。遊戯からスポーツへの連続発達の過程は、もちろん純粋理性というべきものではないが、何か言語の発達に関係している理性的なものが、そのモチーフとなってはたらいっていることは否めない。ディームは、遊戯からスポーツへの移行には、精神の目覚めがその原因になっていると言っている。この移行は、突然変異として生じたものではないから、人間の子らの遊戯の中には、最初から、何か理性的なもの、何か精神的なものが、含まれていると見るべきであろう。

ここで一応これまで心理学者その他から、遊戯について与えられた定義の内容を検討して見る必要がある。その主要なるものは、次の如きものである。

- 1．子供時代のあり余ったエネルギーの放出である。……精力過剰説。
- 2．仕事に努力したあとの弛みである。……休養説。
- 3．将来の生活要求への準備である。……準備説。
- 4．果されなかった欲望へのつぐないである。……欲望説。
- 5．個体発達は系統発達を繰り返す。……反復説。

はたして、これらの多岐にわたる学説が、心理的にも正しく、また生物学的、文化的、歴史的批判にも堪えうる持続的価値をもつものであるか、どうかを、遊戯の本質そのものの立場から検討することにしたい。

2．遊戯性の本質について

自然が、自然の子らに与えた遊戯は、緊張、歓び、面白さというものをもっている遊戯である。そこでわれわれは、これらの緊張、歓び、面白さが、どこからきているのか、それらの出所を探究する必要がある。

人間の誠実さや真面目さから出てくる緊張が、歓びや、面白さと結びついていることは、一見不合理のように思われるけれど、遊戯やスポーツにおいて、そのことは事実である。例えばスポーツマンが、厳しいルールの規範にしたがって相手と対決する場において、彼の緊張は高調に達し、競技はこの高調した緊張を、解きほぐすプロセスとして行われる。

このようなプロセスで競技者は、相互のフェア・プレーに伴う喜びと面白さを、心の本質の奥深いところで感ずるのである。そのことは遊戯においても同じである。このような緊張、喜び、面白さは、遊戯やスポーツにおける活動そのものが目的であり、活動そのものの中に意味をもつ全体的な、完結的な性格からきている。したがって、遊戯に関するさきの学説が遊戯のそとに目的をもち、また遊戯を他の手段と考えることは、その限りでは遊戯やスポーツの本質を、正当に評価していると考えすることはできない。

3．スポーツの喜びについて

スポーツにおける喜びは、スポーツが自主的な自由なる活動であって、それ自身完結的な行為であることからきており、したがって、この喜びには、真の満足感が伴っている。日常生活の掟さえも何らの効力をもたないスポーツ活動の中で少年・少女たちは、日常生活の習慣や拘束からも完全に解放され、自己本来の姿に帰った別の存在となり、生と自然の感動のうちに、自らを、より高く、人間的なるものへ形成していくのである。心の深層で営まれる喜びと満足の結合からは、必ず新しい人間が生まれる。それは、かかるプロセスそのものが人間形成の自然の道であるからである。クーベルタンは、これと同じ人間形成への道を、歴史のなかに発見していた。

もし少年、少女たちが、学校生活や社会生活において、生と自然の感動から湧き起る喜びや、かかる喜びの与える充ち足れる満足感を、しばしば経験していたとするなら、あの不幸なる少年たちが、果たして発生したであろうか。また、不幸なる少年に代って発言するならば、かかる生活が与えられなかったことに対する反抗であると言える。学校教育の現状は、きびしく批判されなくてはならぬ。また一般に大人たちは、少年・少女たちの魂の自然な折に静かに耳を傾くべきである。

4．スポーツの友情

スポーツの喜びは、仲間がいるからである。その仲間は、きびしいルールの中かで、共に対決しなければならない仲間でもある。自分の名誉と誇りと勝利とを賭けた仲間でもある。かかる仲間が友情が湧くのは、フェア・プレーからくる喜びがあり、この喜びが、高調した緊張の中での競技によって一層深められていくからである。スポーツ仲間が、自然に深い人間関係で結ばれるのは、そのためである。

「友のために命を捨つる。これより大いなる愛はなし」と、キリストは訓えているが、スポーツ仲間の友愛は、まさにそのような友情である。それは心の深層で結ばれる喜びと友愛の深き人間感情の作用である共感からくる。共感とは、あらゆる想像力を駆使して、自己ならぬ他の者となって、他の者の立場に立って、自ら想像し、自ら思考するのである。したがって、つとめて共感し、つとめて想像することは、高い道徳への道である。

したがって、スポーツ仲間が育つ友愛の感情は、社会性や国民性や国際性に至る本質的な基盤である。歴史の光のさす場所におかれたスポーツ、そしてそのスポーツ仲間の友愛は同時に世界人類性につながる所以もそこにある。クーベルタンが発見した、スポーツによる世界平和への道を、高く照すべきである。

5. スポーツの中のルール

遊戯の中に一定の秩序があり、その秩序は遊戯そのものが作るものであると同時に、スポーツの中にも一定のルールがあり、このルールはスポーツ自らが作るものであり、スポーツはルールそのものであるとも言える。

したがって、このルールの違反やルール破りは、スポーツそのものをぶちこわし、スポーツから、その固有な性格を奪って、無価値なものにするので、ルール破りは、スポーツ仲間から厳しく批判され、その仲間から除外される。スポーツ共同体の存続を、その根本から脅かすからである。

スポーツマンは、この厳しいルールにしたがって、自己の可能性を、最大限度に発揮していく、そこに自己を新しい人間に形成する機会が生まれる。昨日までの不可能を明日は可能にしようとして、今日のスポーツ訓練において最善の努力を払うのである。

このように、スポーツのもつ規範性を堅く守って、自己の可能性を発揮するための努力を不断に続けていさえすれば、自己の体力、不屈不撓の気力、勇猛心、持久力、敏捷など、自己の精神力を自ら試練して、新しい価値ある人間へと自己を高めうるのである。すなわち、新しい価値ある人間とは、昨日の不可能を、明日の可能にせんと今日の努力そのものが、自然から文化への道であって、そこに新しい文化価値が生み出されるからである。プラトーが「からだを育てるものは精神であり、精神を育てるものはからだである」と言った境地での可能性の発揮、それこそ人間性の高揚である。スポーツの世界でこそ、かかる人間性の高揚が見られるのである。

6. スポーツにはビジョンがある

子供の遊戯にはビジョンがあり、かれらはそのビジョンを想像によって形象化しようとして行動する。スポーツの競技活動の中でもそれと同じに、何らかのビジョンがあり、そのイメージを形づくる想像力が逞ましくはたらいっている。この想像力の作り出す構想的創造力は、それが文化に高められるとき、運動の流れであるリズムが、音に現れるとき音楽となり、色彩に現れるとき絵画となり、形に現れるとき造形となり、言葉に現れるとき文学となり、詩となる。それは運動そのもののリズムは、宇宙のリズムにほかならないからである。

一九〇六年のIOCの会議においてクーベルタンは、オリンピック大会は、「人類の春」のために四年毎に開かれるが、それは「生命の門口にさしかかった若い世代の活動欲の形象にたいする祭典である」から、「直接近代スポーツの理念を反映したすべての建築、彫刻、絵画、文学作品の中で、五つの競技を新設する」ことをIOCに提案して「この競技はただちに、オリンピック大会に加えられなければならない」と言っている。

遊戯やスポーツは、人間の衝動から発したのものとして普遍性をもち、常に文化に先行して行っている。古代ギリシアにおける第一回オリンピアの開催は、実に紀元前七六〇年であって、ウインケルマンが古代ギリシア文化の形式を「高貴なる単純さと静かなる偉大さ」と評したギリシア文化の高揚期の出現は、それにおくること約三、四百年である。古代

ペルシャ文化，古代エジプト文化，古代中国文化にも，それぞれ固有のスポーツが先行していたことは史実に明らかである。残念ながら，日本文化史におけるスポーツの歴史については，今日なお研究されてはいない。

われわれは，スポーツそのものを，文化という視角から新しく見なおすと共に，スポーツのもつ文化機能を生かすことが大切である。「オリンピック競技は，宇宙の厳肅なるリズムに則って祝福されなくてはならない」とクーベルタンが言った意味で，スポーツの文化機能についても，新しいものの見方が必要である。

オランダの有名な歴史哲学者でまた言語学者でもあるヨハン・ホイジンガは，このスポーツを，最初から文化概念として捉え，文化そのものが，どこまで，遊戯やスポーツの性格をもっているかという新しい理想のもとに「ホモ・ルーデンス」“Homo Ludens”を著している。「ホモ・ルーデンス」は，「人間・すなわち遊戯する存在」という意味である。一九〇三年に「私の心の中では，人間文化は，遊戯のなかに，遊戯として発生し，展開したのだという確信が，次第に強まるだけだ」と彼は言っているが，その研究は，一九三八年にホモ・ルーデンスを公刊するまでの数十年間つづいている。

要するに，スポーツの中にはビジョンがあり，そのイメージを形象化する構想的創造力があらゆる文化の母体であると見ていいであろう。

第3章 スポーツの効果

1. スポーツの身体的効果

いかなるスポーツの修練も、それが真のスポーツマン・シップとフェア・プレーに結びつかないならば、その修練は真の修練ではない。身体の修練と精神の発達のような緊密なる関係を保持しながら、現代スポーツ医学が教える「スポーツの身体的効果」についてまず叙述し、次いで現代スポーツ心理学が教える「スポーツの心理的效果」について叙述していこう。

1. 長育（身長、脚長、上肢長など）に対するトレーニングの効果

スポーツが長育の発達を、どのくらい助長するか明らかでない。

しかし、日本人が明治以来急速にキングサイズ化しているのは明らかな事実であって、これには、栄養改善、生活様式の変化などと共に、スポーツの隆盛が関係しているものと思われる。

2. 筋に及ぼす効果

スポーツによって筋は、活動性肥大を起す。すなわち、筋繊維はその太さを増し、それに伴って筋力が増してくる。

また筋の持久力も増してくるからなかなか疲労しなくなる。トレーニングした筋では、活動のエネルギー源となるクレアチン燐酸やグリコーゲンの量が増してくる。またミオグロビンが増して、筋への酸素の供給を円滑にする。

3. 呼吸循環機能に及ぼす効果

スポーツは肺活量を増大させ、胸郭を広くする。また心臓がその容積を増大して、いわゆるスポーツ心臓と呼ばれる状態になる。このような心臓では一般に安静時の心拍数が少なく、また運動負荷によって一時的に心拍数が増すが、一般人に比較して回復がずっと早い。スポーツ心臓では、心拍出量が増加する結果、酸素摂取量が増加する。

4．神経に及ぼす効果

スポーツを行なうその結果、運動が巧みさとスピードを増し、正しいフォームにより能率的に運動することができるようになる。この結果運動が反射化し、無意識の状態でも正しく動作を行なうことができるようになる。

5．関節に及ぼす効果

スポーツは、関節の可動性を増し、人体を柔軟にして、美しい動作ができるようになる。

ここですべてを通じて第一に解ることは、スポーツが、最後まで活動力のある人間の健康を育て、しかも運動からくる巧みさとスピードや正しいフォーム、そして疲労回復の速さが、仕事の能率を高め、事故や傷害に即応するスピードのある反射運動が、交通や作業場において、人間の生命を安全にまもることができるということである。この活動力のある健康の維持と生命をその危険から護ることは、人間存在にとって最も重要な事柄である。

第二は、幼な児の身のこなしにわれわれは、美しいものを感じるが、それが大人になると硬くぎこちなく憎くなっていくとき、スポーツによる関節の可動性の増大は、身体の動きに柔軟なしなやかさを取り戻し、その動作には内部から出てくる美しくさ、すなわちうるわしさが見られるようになることである。スポーツ・プレイヤーが、よく彫刻家の制作対象となるのも、身体の動きのなかで形づくられてきたうるわしさのせいであろう。

第三は、これらの身体に及ぼす効果をもつスポーツは、同時にそれらに相応する心理的影響を精神に及ぼして、その機能を高めていくことである。スポーツの技術練習における動作のスピード化、精神化などはすべて、それらに対応する心的機能をも同時にスポーツの練習のなかで育成して、ダイナミックな精神のはたらきができるようになる。ここにわれわれの目標とする完全なる健康がある。こうした健康は、日本人の寿命が飛躍的に延長されつつある時に、とくに考慮すべき問題であって、最後まで活動力のある人間は、このような健康から生まれる。また少年が学校の学習において、職場の作業場において、この心身の健康が、かれらの学習や作業の能率を効果的に向上させることは間違いない。

以上に述べたことは一般論であって、少年期のスポーツの場合、教育はつねに少年の発育に一步先行するのが原則であるから、ここでもスポーツの種目や練習上の研究が、一つの重要な課題になる。そのような意味で、次の「中学生期のスポーツ」は考えられ

たものである。

- (1) 中学生期は、陸上競技、水泳、球技、スキー、スケートなど、あらゆるスポーツの初歩的技術を獲得すべき年令である。この時期にスポーツの基礎を確立しておかないと、一生スポーツに上達する機会を失い、また体力の獲得にも失敗する。
- (2) 中学生の時期は、思春期の急激なる発達期に当る。しかし筋肉や骨格、呼吸循環機能の発達がいまだ十分でないから、あまり激しい練習を行ったり、身体に局所的な重荷がかかる種目ばかりに片寄った練習をしてはいけない。こうすると、身体の一般的な発達を阻害し、また骨や関節や心臓などの障害を起し易い。したがっているようなスポーツ種目に親しむことが大切で、専門種目の練習をするには、あまり適当な年令ではない。例えば、陸上競技でいえば、走、跳、投の何れも練習することが望ましい。
- (3) 思春期には、固体差が大きい。また男女差が著明に現われてきて、したがって、各人の体力や発達段階に応じて、スポーツを行うことが必要で、この意味で、スポーツを行う場合のグループ分けが必要である。

以上のことから、時として体育専門家の中にさえ、中学時代の少年スポーツ練習を、鍛練期の激しい練習と考え、専門種目の練習にのみ片寄る人が見られるが、これは熟考を要することである。

少年工養成のばあいも、単能工としてよりもオールラウンド・アップレンチスト方式が、同じ熟練工養成として優秀であることが実証されている。完全なる健康を目指すスポーツが、あとに身体的障害を残すような無謀を犯してはならない。

それらに反して、生涯の活動力の基礎となる体力の増進のためにも、無意識の中にも正しく動作できる反射的運動獲得のためにも、いくつかの種目の基礎練習を修練することは必要である。またスポーツ自身の高度の発達と考えられる自動的熟練のためにも、この少年期のスポーツ練習は、それへのかけ替えのない時期である。

さらにグループ分けの練習が必要なのは、チームワークと同じに、グループ仲間は、自発的に励ましあい、共感と友愛からくる真の満足感を与え、スポーツへの愛好は、生涯つづくであろう。

2. スポーツの心理的効果

少年の人間形成に及ぼすスポーツの心理的効果について、とくに次の四項目をあげる。

1. スポーツは少年の活動欲求を満足させる

身体的発達の著しい少年たちは、体格も体力も充実してきて、おとなに近くなり、自分の力を試したいという強い欲求をもつようになる。

しかも、大人を意識しはじめた少年たちは、おとなと自己とを比較することによって、心理的には、おとなに対する一種の劣弱感をもち、まだおとなではない、という意識をもっている。すなわち、心理的には、常におとなの圧迫を感じ、早くおとなになりたい、という強い欲求をもつようになる。

そのために、少年たちには、しばしば、おとならしく振舞うこと、おとなのようにみせる行動がみられる。

体力の充実に伴う活動の欲求は、各種のスポーツに対する関心とその実践を推進させるが、スポーツは、おとなと同様に、あるいは、それ以上に活躍することのできる活動であり、彼等の活動の欲求とおとなに対する心理的劣弱感は相俟って、彼等をスポーツに駆り立てているものと考えられる。

しかも、彼等は、スポーツによって、まわりの人々に認められたいという強い社会的承認の欲求、あるいは自己顕示の欲求が満足されることを知っている。

このために、少年たちはスポーツが好きであり、それに対して強い欲求を持つのである。

これらの欲求が満足させられない場合には、彼等は街頭をさまよったり、反社会的な行動に走ったり（非行）あるいは、実践的、活動的な欲求を、映画やスポーツを見ることなどによって代償的に満足させようとするであろう。

現在、ともすればスポーツが見たり、聞いたり、読んだりするものとして受動的に楽しめる傾向があるのは、少年たちの活動欲求を満足させるようなスポーツの場がないことも一つの大きな理由であるといわなければなるまい。

少年たちの活動欲求は、スポーツの実践によってこそ真に満足させられるものであり、彼等のエネルギーは開放されると考えられる。

2. スポーツは生活上の緊張を解消させる

現在の社会生活において、強い緊張の場におかれているのは、おとなだけではない。おとなの前に立たされている少年たちは、未知の場に立たされているのであり、その将来は可能性に満ちている。そのために、彼等は心理的に不安定であるが、その上、受験、就職など、解決しなければならない問題が常に彼等を圧迫しているといってもよいであろう。ことに、両親やまわりの人々の自己に対する過大な期待は、時には、心理的な負担になってくる場合もある。

さらに、今日の社会生活において、交通、通信機関の発達に伴なうマスコミは、彼等に目から耳から強い刺激を与えている。

これらの緊張は、どこかで、なんらかの形で解消させられなければならない。

一般的にいえば、これらの緊張の解消は趣味の世界に求められる。自分の好きなことを、みずから実行することによって解消されるわけである。このような活動の中には、音楽、絵画、彫刻などの芸術的活動もあるが、少年たちに好まれる活動的なスポーツも、彼等の生活上の緊張を解消させるのに有効な働きをするものである。

活動自体が精神的な緊張を解消させる役割をするが、スポーツの世界は、日常生活とは次元の異なるものであり、日常生活とは異なる価値体系によって支配されている。そのためにも、日常生活における精神的な緊張は、スポーツの実践によって解消されると考えられるのである。

3. スポーツは耐単調能を育てる

科学技術の急速な進歩は、いわゆる技術革新を生み、第二次産業革命を招いている。現在における技術革新の進行のテンポは、想像以上に急であり、少年たちは、身近に迫っている新しい社会に適応できるような能力を身につけなければならない。

その場合に要求されるのは、新しい産業技術の理解と習得および作業の単調さに打ち勝つ耐単調能であると考えられる。すなわち、生産の合理化、機械化によって、作業はますます単調になり、単調な作業の繰り返しが要求されることになり、それに耐えられるような能力を身につけることが必要となる。

作業の単調さは、人間性とはかけ離れた無味乾燥なものであり、人間が恰も機械の一部として働かなければならないような単調さである。いわゆる人間疎外の現象が生ずると考えられるのである。

このような生活の中に、人間生活としての血を通わせ、生きる喜びを感じさせるのは、人間の自然的、全身的活動であるといわなければならない。

スポーツは、まさに、自然的、全身的な活動であり、その活動に全力を尽してぶつかり、そこに生きるよろこびを見出すことのできる活動である。

スポーツを楽しみ、それを実践することによって、予想される将来の社会生活における単調さに耐える能力を、少年たちは身につけることができる。

4. スポーツは自己形成の態度を養う

スポーツには、他の人あるいは他のチームとの競争のみならず、自己の記録や技能との競争が含まれている。

自分の記録や技能を現在よりも伸ばしたいとか向上させたいという心的過程は、目標を持ち、その目標実現のために努力を重ねるといった自己形成の態度に連がるものである。

目標実現を阻止する条件、あるいは障害や困難を克服して、目標実現のために努力を重ねることによってのみ目標は達成される。

そこには、自己の現状の客観的認識が必要であり、その認識に基づく目標達成への見通しが要求される。スポーツでは、たえずこのような心的過程が繰り返されていることを忘れてはならないであろう。

現在の自己を少しでも向上させようとする態度こそ、現在の少年に望まれる基本的な生活態度であり、社会生活においても必要とされる態度である。

しかし、すべての障害や困難を克服して、目標の実現に邁進するという態度は、スポーツにおいては、スポーツに対する強い欲求とか、スポーツに対する愛情などに支えられたものである。

したがって、その態度は、必ずしも、すべての日常生活に適用されるものとはいえない。しかし、基本的な態度として共通性をもったものであり、指導の如何によって、日常生活の場面に移転されることが可能である。スポーツマンの中には、スポーツにおける態度を自己の人生観にまで高めている人が多いことは、このことを実証するものであ

ろう。

しかも、スポーツにおける競争が単なる斗争ではないことに留意しなければならない。そこには、両者が公平に競うためにルールが設けられており、それを守ることが要求されている。いいかえれば、ルールによって斗争でなく競争が行なわれているのである。

また、その競争は、協同の上に成立しているものである。スポーツは技を競うことを楽しむものであるが、スポーツを楽しむためには、相手がいなければならないし、相手がルールを守ってくれなければならない。すなわち、相手が味方と同じ立場で競技をするのでなければ楽しむことができないし、スポーツは成立しないのである。

このように考えてくれば、スポーツにおける競争は、相手と味方の協同の上に成り立つ競争であると考えなければならないであろう。

スポーツにおいて、相手の立場を考える、相手を尊重する、あるいは自己の最善を尽くすことが要求されるのは、競争の共通の基盤に協同があるからである。

また、味方の協同は、相手と競争するという立場で強化されており、競争的な協同であるという特徴を持っている。そのために、ともすれば、味方の協同のために、排他的になったり、チーム利己主義が生れたりすることもある。しかし、その競争の基盤に、両者の協同があるために、競争に伴う排他的傾向や利己主義的傾向が解消されて、スポーツがスポーツとしての意味をもつものであることも認識しておかなければならないであろう。

第4章 スポーツ少年団の指導原理

人間形成、即ち人間を、その個体のもつ発育・発達の可能性を完全に実現するためには、他の多くの教育的文化財の中に在って、特にスポーツによる教育が有効であることは、すでに明らかにされた。そこで、スポーツ教育の方法であるが、先人の「スポーツは激蕩なり」との示唆は、古来不変の真理である。このようにスポーツは両刃の劔であって、敵の邪も切るが、己れの邪も切る。スポーツを通じての教育においては、とくに誤った用い方をするものがないようにつねに自ら警告する必要がある。

まず、そのためには、スポーツ実践のための統制され、整理された「場」、すなわち、プレーや、ゲーム等の場が与えられなければならない。スポーツの整理された場は、当然そこに、思想や体験や教育的情熱の豊かな教育者が居なければならない。どのように気宇広大な理想や目標を設定したとしても、そのための優れた運搬者がいなければ画餅に等しくなる。

1. 人間形成のためのスポーツの場（以下略）

第5章 時代の要求と新しい少年像

世界は動いている。この動いているなかで、やがて少年の内部で自ら形づくるべき新しい人間像を設定することは、たしかに一種の冒険である。しかし現実に少年たちは、この

世界の流れの中で生い立っており、しかも自国民族の精神的危機の中にある少年、また誤れる受験本位の学習に苦しんでいる少年の健全なる育成のために、敢えてその冒険を冒し、少年育成の目標を確立しなくてはならない。

それにしても、さらに大きな困難が残されている。人間像は、一つの全一なる姿として描かれなくてはならない。それを人間形成の基本的要素に分類して、それらをいかに賢く組織的に叙述しても、その全貌を生き活きと把握することは困難である。ただこの障害を乗り越える道は、人間の洞察にすぎる外に手段はない。

そこでまず、基本的要素に分類する従来の方法をさけて、個人と社会、それらを内面的に結合している道徳と文化の三つの単位に区分して、それらを総合的に叙述して、時代の要求する新しい少年像を、日本スポーツ少年団の教育目標とすることを試みた。

1. 個人の教養

デモクラシー社会の優越性は、高い教養を身につけた個人の協力集団であることから来ている。世界史上最初の共和国アテネではプラトンが出て「教育論」をかき、18世紀のフランスではルソーが出て「エミール」をかき、同じ世紀のスイスではペスタロッチが出て、人間教育の神髄を示した。これらはすべて、デモクラシー社会そのものが、個人の高い教養を求めていることを示している。この際、教養とは、単に学校に通い、読書に耽り成績をよくすることではない。もしそれらの知識が、生活における自己指導とならないならば、装飾の具に等しい。真実の教養とは、自己の行為を日々更新していく知恵の力をいうのである。かかる教養として次の4項目を挙げる。

1. 弾力性のある完全なる健康、したがって最後まで活動力のある人間として、自己の天寿を完うする。
2. 自己形成の英知を身につけ、誠実なるヒューマニストとして、自己とその周囲を幸福にする。
3. 友愛を基調とした協同の精神に富み、サービスの習慣を身につけ、自己の社会化に努力する人間となること。
4. ユーモアの感覚を養い、他人に対する寛大なる心と自己に対して独りを慎むきびしさを身につけた人間革命に努力すること。

ここで、第三項に述べた内容にたいする補充として一言述べておきたい。現代は nationality の高揚期である。大戦後、アフリカ大陸および東南アジアにおける諸民族が解放されて独立国となり、これらの諸国は、internationality を背後の楯として nationality の高揚に努め、その発展すなわち新しい国造りに邁進している。このような事情から彼らの国連における発言権も増大してきている。少年たちの育成は、かかる国際情勢から要求されている国民性と国際性は、自己の社会化に努力することが、基礎となるので、第三項が盛られた。

2. 社会人としての要求

君主政体から民主政体への移行は、個人の精神面における高い教養を要求している。少

年・少女たちは、民主政治の宝刀である権利、平等、自由を身につけるために、義務、友愛、責任の観念をも共に学ばなくてはならない。

そして日本の民主政治への移行に示された未熟さの故に失われた民主社会の建設への熱意を回復して、正しい進路を発見して未来の逞ましい発展を期さなくてはならない。少年たちは実に、民族の今日の危機からの脱出と未来的発展への重大なる課題を彼らの双肩に担っている。今日の教育によって、明日の運命は決定されるのである。

5. 民主思想の宝刀である権利、平等、自由を、義務、友愛、責任と共に享受して日常生活のうちに実践し、自国の民主社会建設に、積極的に参加できる有能なる人間となり、自国への愛の感情と、他民族への尊敬の念をもつ人間となることである。

3. 文化と道徳からの要求

文化と道徳とは、共に精神の自由と想像力に根ざす心のはたらきである。二千年も持続的発展を遂げてきた日本文化は、世界史に比類がない。かかる輝かしい文化への国民の同じ回想と希望とは、それこそ祖国にたいする感情の湧き出る源泉である。そして同時にこの文化の意識から生まれる祖国愛こそ、他民族の文化への共感を呼び、他民族を尊敬する感情の母胎でもある。それは、日本の文化そのものが、日本の自然、日本の風土、日本の歴史的な精神から生まれたものであり、したがってそこから生まれ出た文化意識の中にこそ国民の自然感情としての祖国愛があり、この祖国愛なしに、他民族や世界人類に対する真の愛の感情は生まれない。「道は近きより遠くに及ぼす」という孔子の訓えは今日でも生きている。

かかる日本文化の中で培われた情緒、他人と共に喜び悲しむ豊かな情緒は、つねにつとめて想像するという共感から日本民族の最も人間らしい道徳が生じていた。イギリスの詩人シェレーが、「道徳とは、つとめて想像することである。自己ならぬ他者の立場になって共感することである」とかいているが、わが民族こそかかる洗練されたる道徳の伝統をもつものといえる。この伝統はわが民族の宝であるばかりでなく、国際性の内容を豊富にして各民族を結ぶ全人類の至宝でもある。今日の少年たちが、かかる自国文化と道徳に、自ら誇りを感じ、自ら世界を結ぶパイオニアとならんことを望んで、次の2項目を選んだ。

6. 自己の内部に精神の自由を保持し、つとめて想像し、美の体験によって自国文化の価値を理解し、自国文化への回想と希望のうちに祖国に対する愛の感情を高揚し、自国文化の進歩に貢献すると共に、他民族の文化と国際文化に寄与できる人間でありたい。

7. 日常生活で出会う他人との共感につとめ、善の実践を通して、自己の徳性の高揚に努力し、同胞を愛し、他民族と共に平和と幸福をこの地上にもたらす人類の運命開拓に努力する人間でありたい。そこに少年・少女たちも、人類の一人としての歴史的責任があり、またそれは人類最高の道徳と文化への道ともなる。

以上にのべたものは、時代の要求する新しい人間像ではあるが、もちろんそれは理想像

として少年たちが到達すべきゴールを示したものである。しかし、ここで、少年たちの内部に潜在する無限の可能性と陶冶性を思い、それに信頼するとき、この理想像は、単なる理想像ではなくなるであろう。しかし、スポーツを通じての人間形成への道はけわしく、ややもすれば無統制、無企画なスポーツ・トレーニングに陥り勝ちである。スポーツ生活を、完全な姿で行ずる場においてのみ、スポーツは人間形成の強力な手法となる。

ここにこそスポーツ少年団の本来の意図がある。過去を捨てつつも、過去の偉大なる業績に恥じぬ未来の到来を確信して、近代オリンピックを復興したクーベルタンがスポーツに托した願いは、新しい人間の形成によって、この地上に平和と喜びをもたらすためであった。それこそは人間幸福へのただ一つの道であることを、われわれも確信する。